



なかじま・みねお 1936年長野県生まれ。東京大学大学院博士課程中退。専門は国際関係論。社会学博士。東京外国語大学教授、カリフォルニア大学サンディエゴ校客員教授を経て1997年から現職。アジア太平洋大学交流機構事務総長、国立大学協会副会長など兼務。アマチュア演奏家としても活躍。著書に「現代中国論」ほか。

潮流

潮流◆題字奥野誠亮

東京外国語大学長

中嶋嶺雄 氏に聞く
①

日本人全体の 英語力を底上げし、 かつ先端層を育てる

中曾根前文相が設けた
英語指導方法等の改善懇談会が
審議経過報告をまとめた。
座長として活躍し、
「日本人は英語が苦手」という
現実に立つ打開策が課題と話す
中嶋嶺雄・東京外国語大学長に
改善のポイントを聞いた。

日本人の英語苦手打開策を 具体的に探る

英語指導の改善では、どの層を対象に改善を図るのかが明確にして論議することが必要と述べておられるのはなぜですか。

改善の対象を明確にしな
いまま論じたのでは、改善
の方向が定まりませんから
ね。

今回の「英語指導方法等

の改善の推進に関する懇談会」は、中曾根前文相の私的懇談会として一月にスタートしましたが、その直前に故小淵前首相の「二十一世紀日本の構想懇談会」が英語公用語化論を打ち出していました。そのため、公用語化論との関連が注目されましたが、われわれの懇談会はいくまでも「日本人は英語が苦手である」という現実、その根本に立脚して、では、どう打開するのか、具体的な英語教育改善の方向を探ることを目指しています。

——どの層の国民を主対象に考えるかによって、目指す英語力のレベルも変わってきますね。

例えば、「日本は、英語の歴史的・文化的な背景をもつ国ではないのだから、必ずしも英語に親しまなくても一生経過すのに不自由はない」という説があります。しかし、これから人類社会はより一層グローバル化し、あるいは国境が低いポータル化の時代を迎えるので、なんらかの国際共通語が必要になる。それは、なんととっても英語だと思っています。

それに対して、英語がすべての国を覆ってしまふ英語帝国主義の考え方などと批判がありますが、コミュニケーションの手段としての共通語は最も広く通用している

英語であり、国民全体が英語に親しむ必要がある、と私は思いますね。

その基盤に立って、国際貢献を果たそうという人や、海外とのいろいろなネットワークを築こうとする人たちには、さらに、英語を使いこなす力が必要になる。またインターネットなどを含めた情報の交流を盛んにしようとするれば、ここでもやはり生き残る英語が必要になるわけですね。

——国民全体と、中でも国際的な場で活躍する人たちと両方をならんでの改善が必要になるわけでしょうか。

一つには国民全体の英語に対する理解力をつける、あるいは、英語というものに恐怖心をもたないでよい状況に改善することが全体の底を上げるのです。それと同時に、英語による表現を日常的に駆使して発信できるような人たちの英語力を育てていく必要があります。

ところが、大学を含めて従来の学校教育では文法を学び、訳読することが中心という伝統的なパターンが依然として主流で、その結果、わが東京外国語大学にしてもそうですが、教職員の中で外国語、特に英語の表現能力をもっている人がどれだけいるかというといささか心もとないものがあります。例えば職員の中で、実際にすぐ英語

で手紙が書ける人がどれだけいるか、コミユニケーションの点は非常に不十分ですね。東京外国語大学においてさえもそうなので、すから、ましてや一般の官庁や学校、大学にしてもそうではないかと思えますよ。

そういった部署のスタッフを含めて、日常的に英語を運用できる能力を身につけることは非常に重要だと思えますね。そうすることは、決して、日本の文化や日本の伝統をおろそかにすることではなく、逆に英語的な世界からまた日本を見直すことにもなると思っています。

三年生からとは限らない 小学校英語

国民全体の底上げをはかる意味では小学校英語の重要性が大きいですね。

早期教育の是非といった論点との関連が必ず出てきますね。懇談会の審議経過報告の際に、新聞記者たちから質問された中で、「小学校三年生から総合的学習の時間で英語に親しむという記述はあるが、一、二年生に関しては指摘がないではないか」と問われて、実はびっくりしたのです。

というのは、何年生から学ばせるなどと区切って考える論点は私の意識にはなかったからです。懇談会で論議し、意見を調整していく過程でもそんな論点は出ませんでした。

した。そもそも何年生からと区切る発想自体おかしいのです。たまたま学習指導要領で小学校三年生から総合的学習の時間が導入され、そこで国際理解教育として英語の学習をする例が増えてきたということであって、それをうまく活用すればよい。

まあ、文部省の立場からすれば、一応、学習指導要領によれば三年生から総合的学習の時間がありますから、と言わざるを得ないということなのですが、私は、英語を学ぶのは三年生から、と限定したつもりはありません。

よく発音の面から「十歳の壁」などということが言われますが、それ以前に始めた方がよいというお考えですか。

音楽の才能教育で世界に知られている鈴木メソッドというものがあり、楽譜も読めない年齢なのに耳から聴いた記憶でバイオリンの曲を演奏することで知られますが、四歳から九歳あるいは十歳くらいで、子どもの発育段階において変化が起きるのです。それ以上の年齢になると、自分で自覚して何かを学ぼうという認知的な学びの姿勢になります。それ以前ではもともと自然に、耳から聴いて親しむ。楽譜を見ているわけではないのに、モーツァルトやビバルディの協奏曲が弾けるようになりますからね。

その年齢の秘める力は大変なものです。

私は英語の場合もそれと同じ形でよいと思います。その年齢を過ぎると、もつと違った訓練が必要になります。音楽で言えば楽譜の読み方を教えるとか、英語では文法を教えるなどの学習になっていくのであって、文法を知ることが身につけたことの裏付けになりますから、音楽の場合に耳から聴いた曲が楽譜を知ることによって裏付けを得るのと同じことです。

その意味でも、小学校での導入はもつと自然的な形で英語に親しみを深めていくことでよいのではありませんか。

——音楽の場合は感性の世界ですが、英語の場合はどうなのでしょう。

英語だって音楽と非常に関連していると思いますよ。感性、センス。しゃべることも含めてそういう世界については、音楽と言語は共通のものがあると思っています。

国民的実験が必要なバイリンガル

——先ほどの十歳の壁ということとは、それ以後に学び始めると、英語を聞いてもそ

れをいったん日本語に置き換えて理解し、また英語に戻すという作業になる。その置き換えを必要としないのが十歳以前だという理解でよろしいのでしょうか。
 そういうことですね。文法などを考えずにね。英語に浸る中で自然になじんでいくことができる年齢ですからね。



そういうったバイリンガルで育つことに対して、言語学の見地などから否定的な見方をする意見もあるわけですが、必ずしもきちんと論議され実証されてきているとは思えないので、一つ、国民的な実験をしてみるかどうかと思います。

英語を早い時期から学んでみて、その効

果や影響はどうか。十数年もあれば答えが出せるのですから実験してみたらよい。英語を早くから学ぶと、小学生の国語力が落ちるといった意見がありますが、私は、そんな結果にはならないと思いますよ。

米国で幼児が最初に接するような英語の本を見ると、木からものが落ちる絵が描かれていてそれが「ダウン」だ、飛行機やロケットが上空へ飛んでいく絵には「アップ」だという。このような覚え方でよいのです。それで、日本語が空洞化するとは思えませんね。

——英語に触れる機会を多くするという提言もありますが、英語を使わない訳にはいかない、あるいは自然に英語が耳に入ってくるような環境をつくることですか。

——そういう機会が重要だと思っています。常に英語的な環境に触れる。英語のラッシュ（洪水）というものの中に自然に置かれることが必要ではないでしょうかね。

FENの外国語放送をよく聞いてみるとか、CNNのニュースを聞くとか、いろいろな方法があり得るでしょう。少なくとも英語をコミュニケーションの上で必要とし、社会である種のリーダーになるような人たちには、そのような経験を豊富にもつようであってほしいと思いますね。